

# ロシアのウクライナ侵攻における軍事作戦

## 陸上作戦

(2022年4月20日現在)

小川清史

### 「全般」

2022年2月24日、ロシア陸軍がウクライナに対して、5方向から攻撃を開始した。

北から2個正面①キーウ正面、①ハリキウ正面、南から②クリミア正面、東から2個正面③ルガンスク正面、③ドネツク正面からである。



<出典>防衛省ホームページの図 (2022年3月8日時点) に矢印を筆者が付記

以下では、質問に回答する形式で述べてみたい。

質問は、以下の5つである。

- 質問1 今回のウクライナでは、ロシア軍は異なる戦い方をしたのか。
- 質問2 ロシア軍は、キーウ正面に侵攻しつつもなぜ撤退したのか。
- 質問3 なぜロシアはジョージア侵攻時のような短期決戦ができなかったのか。
- 質問4 ウクライナ軍は何を目指して戦闘をしているのか。(エンドステートは何か)
- 質問5 アメリカの情報戦は成功したのか。

## 質問 1 今回のウクライナでは、ロシア軍は異なる戦い方をしたのか。

2013年のゲラシモフ参謀長の論文を見てみたい。同論文によってロシア軍ドクトリンの考え方が理解出来る。

ゲラシモフ論文では、『戦争の法則』そのものが実質的に変化しており、政治的・戦略的な目標を達成するために非軍事的手段の果たす役割が増大している。今後の戦いでは、非軍事的手段は軍事的手段の4倍であるべきであり、より効果の高い非軍事的手段によって目標を達成する。

軍事的手段は、情報作戦（敵に対し情報手段を用いる攻撃）<sup>1</sup>や特殊作戦部隊の活動を含めた非公然の性質を持つものを使用し、公然たる軍事力は紛争が成功を収めそうだったときに初めて使用するものである<sup>2</sup>と述べている。

そして、ゲラシモフの論文はその翌年2014年に改訂された正式なロシア軍事ドクトリンのベースにもなっているものであり、ロシアが根拠に基づいて行動することを考えると、最初から地上部隊を投入したことには疑問を感じざるを得ない。

実際に過去の戦闘ではドクトリンに忠実な戦いをしている。

2014年の東部ウクライナに対して、ウクライナ国内の親欧米派勢力の活動を封じ込めるとともにクリミア半島などの親ロシア派勢力を防護するため、クリミア半島及び東部ウクライナ地域に軍事侵攻をした。

特殊部隊のLGM（リトル・グリーンメン）等の軍組織によるゲリラコマンド攻撃、親露派独立武装勢力への武器・装備等の提供、航空攻撃、ロシア領内からの国境越えの砲撃等の火力支援、諜報戦、経済戦、政治戦、心理戦等のハイブリッドな戦いを実施した。

更には、戦いの終始を通じサイバー攻撃を行い、紛争初期段階では情報窃取や政府・軍のC4Iシステム混乱のための攻撃、停戦以降にはウクライナ全体に影響する社会インフラ、例えば電力会社に攻撃を仕掛けて大規模停電を発生させる、電話システムへのDOS攻撃、鉄道システムのサーバへの攻撃、政府機関、病院、銀行、地下鉄、ガソリンスタンド等に対するサイバー攻撃を行い業務不能状態へと追い込んだ。

また、チェルノブイリ原発の放射線監視システムに対してサイバー攻撃によって故障を発生させている。

さらに、ロシア軍は電子戦部隊を使って、ウクライナ東部において多種類の電子戦装備によりウクライナ軍の指揮統制を遮断、更にはGPS遮断による無人航空機の無力化などウク

---

<sup>1</sup>（ ）内は筆者加筆

<sup>2</sup> 小泉悠「現代ロシアの軍事戦略」（ちくま新書、2022年3月15日、p 74～75）

ライナ軍の戦力発揮を妨害したとの指摘もある。

2014年におけるウクライナに対するロシア軍の一連の行動では、非軍事手段を多用し、大規模な地上部隊を投入しないままで目的を達成している。

また、2015年のシリア紛争への軍事介入をみてみたい。

ロシア軍は、アサド政権の存続、シリア内のロシア軍基地などの防衛、及び国際テロ組織による脅威への対応等を目的として、軍事介入した。

2015年9月以降、シリア国内のタルトゥース海軍基地、ラタキア市南東のフメイミム航空基地を拠点として、戦闘爆撃機や長距離爆撃機による空爆、戦略爆撃機からの衛星誘導を活用した精密誘導弾による攻撃、カスピ海や地中海に展開した水上艦艇や潜水艦からの巡航ミサイル攻撃、一時的に展開させた空母の艦載機による空爆などを実施した。

航空作戦では、最新鋭レーザー誘導爆弾搭載 Su-30 などの戦闘爆撃機、Tu-22M3 長距離爆撃機などによる空爆が行われた。

また、ロシア海軍史上初めて空母から艦載機を発艦させ地上標的に攻撃を実施した。フメイミム航空基地及びクリミア半島のセヴァストポリの防空作戦では、地对空ミサイルシステム S400 を配備して対応した。

こうした航空からの対地攻撃や対空援護作戦に加えて、宇宙戦、サイバー戦、及び電子戦を行い、航空基地防空を行いつつ、NATO 軍の指揮統制とレーダーを妨害したとされている。

以上のように、シリアへの軍事介入においては、地上軍投入しないまま、航空作戦、防空作戦、電子戦、サイバー戦を多用して、戦争目的を達成している。

以上、2014年以降の二回の軍事介入では、地上部隊は特殊部隊などにとどめ、それよりも宇宙戦力、航空戦力、防空戦力、サイバー戦、電子戦による作戦を行ってきた。

ところが、今回のウクライナへの軍事侵攻では、サイバー戦及び電子戦は効果をあまり発揮できなかったようであり、特殊部隊による工作諜報活動及び空挺部隊によるキーウ西方の空港確保に失敗するなど、非公然の軍事活動による成果が極めて低調であった。

これらは、ウクライナ側が2014年の教訓を活かして準備と対応を万全にしていたことによると思われるが、空挺作戦の失敗などに象徴されるようにロシア軍側の拙劣な攻撃にも原因があると思われる。

以上から考察すると、ロシア軍はゲラシモフドクトリンに忠実な戦い方を行ったものの、非公然の軍事活動が失敗したために、地上部隊を投入したのではないとの仮説が立てられよう。

以下の質問では、地上部隊を中心とした作戦について更に分析してみたい。

## 質問2 ロシア軍は、キーウ正面に侵攻しつつもなぜ撤退したのか。

キーウ正面を考察する前に、ロシア軍の各正面の作戦の狙いについて考えてみたい。

陸軍の投入戦力は16万人ほどと言われているが、これは陸軍全戦力33万人の約半数にあたり、国境警備等に必要な戦力を拘置する分を考慮すればほぼ全力での展開と言えよう。

それだけの戦力を投入しての作戦は、失敗すればロシアが周辺国や欧米から侮られるリスクも考えられるとともに、地上戦特に赤い矢印の②及び③の正面攻撃を行うことに伴う犠牲がかなり多くなることは容易に予測できる。

また、①の攻撃はキエフ湖沿いの攻撃であり、3月以降には徐々に気温があがり周辺が泥濘化するために攻撃行動は道路及びその周辺に限定される。

こうした困難な攻撃を行った理由は何故かを考えてみたい。

今回2022年2月24日にウクライナに軍事侵攻したロシア軍は、通常戦力を大きく5つの方向から投入した。この戦いは、ロシアの政治目的から考えるといずれも必要な作戦であったと思われる。

一方、前述したように、ロシア軍はサイバー攻撃を相当程度行ったとともに、特殊部隊を大都市圏、特にキーウ周辺に潜入させ工作活動をしていたと思われる。

その兆候も残っている。兆候とは、市民の後ろ手に縛っての殺害や、死体や車などの障害物に巧みに仕掛けられた地雷などである。

これらは、西側諸国の通常の地上部隊ではほとんど行わない行動である。

しかし、ロシア軍地上部隊はチェチェン紛争においても似たような行為をしたと言われている。ロシア軍は特殊部隊及び地上部隊によるこうした非公然活動をなぜ行ったのか、考えてみたい。

それは、プーチン大統領の停戦条件にある「①ウクライナの軍事的中立化（NATOへの加盟阻止）」にあると思われる。

### プーチン大統領の停戦条件

- ①ウクライナの軍事的中立化（ロシアへの脅威が及ばない非武装化、NATO非加盟）
- ②クリミアの主権承認
- ③ドネツク州、ルガンスク州の全域での親露派の主権承認

<https://www.nikkan-gendai.com/articles/view/life/302778>（2022/04/10 閲覧）

②及び③の条件は、地図上の矢印②及び③で示しているとおおり、正面押しの攻撃でありそれは消耗戦の戦い方である。

キーウ周辺に対する攻撃は、ウクライナの軍事的中立化を強要するためのものであると

推測できる。つまり、ロシアは非軍事的手段では目的を十分に達成することが出来ないと判断したために、地上戦力の投入に踏み切ることとなったと考えられる。

ロシアの戦争目的を再度確認すると、以下のようになろう。

プーチン大統領が表明したウクライナとの停戦に向けた条件こそが戦争目的に該当する。なお、各番号は、ウクライナへの軍事侵攻の矢印番号と符号している。

最初の目的である①ウクライナの軍事的中立とは、ベレンスキー ウクライナ大統領が表明していた NATO 加入の阻止である。

非武装化の実現はかなり無理のある停戦条件であるので、ここでは「ウクライナの軍事的中立」の条件をどのように軍事的手段で実現しようとしたのかを分析したい。そのために、過去にロシア軍が行った類似の戦争を参考にする。

まずは、2008年に勃発したロシア・グルジア戦争から確認する。同戦争の結果、ロシアは独立承認した南オセチアとアブハジアとの間で国境警備協定を結ぶ(2009年)とともに、更にアブハジアの間ではアブハジア領内にロシア軍基地設置の協定に署名(2010年)するなど軍事的協力関係を強化した。

戦争勃発の直接的な原因は、南オセチア及びアブアジアの分離独立を求める動きが活発化したため、親欧米路線のグルジアが軍事力で制圧しようとしたところロシア軍を含む合同平和維持部隊と衝突したことにある。武力衝突自体は、EU議長国フランスなどの和平仲介努力もあり、5日間で収束した。

この戦争でロシアは、グルジアの大統領府、国防省、メディア、銀行などのウェブサイトに対して大規模なサイバー攻撃を仕掛けている。このサイバー攻撃は従来戦力である陸海空の作戦に連携したものであり、これが歴史的に前例のない新たな戦争の形態として世界中の関心と警戒心を高めた。

また、地上戦力の投入は南オセチア正面では南オセチア地区の首都ツヒンバリを占領していたグルジア軍をその攻撃拠点であるグルジア内のゴリまで攻撃し圧迫した。

この際、航空攻撃を加えるとともに、戦車、砲兵を伴う地上機動戦を行い、グルジアの首都トビリシには進撃することなくその近くまでの進撃でとどめた後に撤退している。

また、アブハジア正面では、グルジア沿岸に艦艇で海上封鎖をするとともに、港町ポティに特殊部隊及び空挺部隊を投入し同町を占領した。

2009年2月に米務省公表の「2008年の人件状況に関する年次報告書」には、「昨年8

月、ロシアは不釣り合いに大規模な兵力を使用し、グルジアの国際的に認められた国境を越えて、軍事的侵攻を行った。グルジア部隊及びロシア部隊による軍事作戦には、無差別の武力行使が含まれ、多数のジャーナリストを含む民間人死傷者が出た」と記述されている。

総合的に見ると、ロシア軍はグルジアの首都トビリシへの攻撃は実施しないまま、ハイブリッド戦と通常戦力を組み合わせた攻撃により、南オセチア及びアブハジアとの軍事的協力関係を強化し、同地域のロシア人保護との戦争目的を達成するとともに、NATO 加入を阻止した。

本戦争の結果、欧米はロシアの軍事行動や内政の動向に、ロシアは NATO の東方拡大などの対外政策に、相互に懸念を表明するようになった。

ゲラシモフドクトリン以前の戦争であるものの、サイバー攻撃も組み合わせて大規模な地上戦力をもってグルジア侵攻を行い、政治目的をほぼ全て達成している。

今回のウクライナ侵攻において、ロシア人の保護のためのドネツク及びルガンスクへの攻撃は地域獲得のための戦いにより地域を占領した。

また、ウクライナの NATO 加盟阻止に向けた攻撃は首都キーウへの軍事的圧力をかける戦いであった。

結果的にウクライナが NATO 加盟を断念するという条件を引き出し<sup>3</sup>、ロシア軍は政治目的を達成したため、地域獲得の必要のないキーウ周辺からは撤退したのだと思われる。

### 質問3 なぜロシアはジョージア侵攻時のような短期決戦ができなかったのか。

米軍の評価のように数日以内で決着をつけるような作戦、すなわち機動戦に主体を置く作戦が今回はロシア軍になぜできなかったのだろうか。

逆に考えると、どのような作戦であれば数日以内に決着をつける作戦となったのか、それは実行可能だったのか考察してみたい。

その作戦要領は、キーウ正面及びハリキウ正面、それとクリミア正面からの南北両側からの空地機動による攻撃である。

その作戦によりキーウを占領するとともに、ウクライナ中央部から東部へと完全な包囲作戦をする要領である。

---

<sup>3</sup> <https://news.yahoo.co.jp/articles/40b315088566cae2f86dacfa9dab47265fd82af3>

(2022年4月15日閲覧) ロイター通信によると、ロシアとの停戦交渉に臨んだウクライナ側代表団は29日の協議終了後、関係国による安全の保障と引き換えに北大西洋条約機構(NATO)加盟を断念することをロシア側に提案したと述べた。(共同)

この作戦が成功すれば、ウクライナが早々に降参する可能性は高くなり、結果として短期間での決着となろう。

一方、機動戦にはリスクがつきものであり、降参せずに抵抗され短期決着に失敗した場合には、長い兵站線、航空優勢を一定期間維持しなければならず、かつ長距離機動・攻撃で損耗した地上第一線部隊交代するだけの戦力が欠乏する可能性も考えられる。

更にウクライナの同地域に居住する民間人も全て包囲することとなり、民間人の犠牲者数は現在の数十倍かもしれない。

その場合は 100 万人～300 万人の避難者が避難出来ない状況になる。国際世論を完全に敵に回し、より困難な状況をロシアが自ら作為することとなろう。

つまり、地上からの大包囲作戦は成功する可能性が低いとともに、失敗した場合のリスクが大きすぎ、その処置も極めて困難であったらう。

また別の作戦要領として空挺作戦による首都の早期占領確保である。

これは、作戦初日に実際に行われた空挺作戦であるが、この作戦によりキーウを占領確保して、大統領及び側近を捕獲し、降伏させることに成功していれば短期決戦で終わっただらう。

しかし、空挺作戦は対空援護もなく単独で行われ、待ち構えていたウクライナ軍によって撃破されてしまった。

空挺作戦によるキーウ占領は 2014 年であれば成功した確率は高かったであろうが、今回はウクライナ軍の装備・練度の進化によって不成功に終わった。

どのようなやり方によっても空挺単独侵攻では不可能に近いだろう。

以上から、短期決着はいずれにしても、ロシアとウクライナの相対戦闘力を比較すると極めて困難と断定せざるを得ない。

では、そもそもキーウ攻撃に空挺部隊を投入したものの、航空優勢もとれず近接航空支援も不十分であったが、なぜか。

空挺攻撃は、そもそも戦争に最後のダメ押しをするためのものであるところ、緒戦に投入し、ウクライナ軍が組織的に防御している地域近郊に降着したため、早期に機動打撃をうけてしまっている。

敵の地上部隊の配備や対空防護力が相当弱くない限り成功しない作戦である。

そして、キーウ近郊で空挺部隊とリンクアップするべき地上部隊の投入も遅く、全くリンクアップできずに終わっている。

ロシアの軍事ドクトリンでは、空挺部隊投入は紛争に一定の結論が見いだせた段階であるべきところ、戦果を拡張することも何も無い段階で投入しており、全く意味をなさない作

戦となっている。

空挺部隊は地上部隊との提携が出来る段階に投入するべきであるとともに、その場合でも航空優勢をとり、ウクライナ軍の対空火網を十分に制圧排除してから空挺部隊を投入し、地上部隊と早期にリンクアップできるような作戦をすべきところ、ほとんど整合がとれていないとしか思えない作戦には、ロシア軍の全般作戦統制力の弱さを感じざるを得ない。

と判断しているところに、ロシア軍の総司令官にドヴォルニコフ南部軍管区司令官を任命するとの報道があった。

つまり、これまで軍管区司令官ごと、空挺部隊司令官ごとの作戦を行っていたことが判明した。2月24日から3月までのちぐはぐな作戦による損耗はかなりの大きさであるとともに、4月13日時点では停戦交渉が元に戻ってしまったとのプーチン大統領の発言があった。

これから類推すると、ロシア軍は停戦交渉をより自分達の要求に近い形で決着させるために新たな総司令官の下、攻勢作戦を実施する可能性が高いと言えよう。

大規模作戦以外でも個々の戦闘部隊や特殊部隊は停戦を困難にするような行動もとっている。これらもロシア軍による統制力の欠如や弱さと考えられる。

では実際にこれまでに判明しているロシア軍による戦場での行動を確認してみよう。

キーウ周辺からロシア軍が撤退した後は、民間人の悲惨な遺体と、仕掛け地雷が多く設置されていた。これは、チェチェン侵攻時の東部軍管区の行為と類似しているとともに、特殊作戦部隊の行動であると思われる。

そもそもキーウへの攻撃は、ゼレンスキー大統領の考えを変えさせる、民衆の厭戦機運を醸成するために行われたと推定されるどころ、そこで活動した地上軍も狙いが同じであったらう。

つまり、戦後復興を妨害しウクライナ人の戦後復興の気運や戦争継続機運を削ぐ目的と、ロシア軍に同調もしくはスパイ的に活動する人物を作ろうとしたところ工作できなかつた人間を葬ったと考えられよう。

通常軍であれば、自分達の後退行動に敵部隊が追撃して、こられないように地雷を接近経路上に設置し、そこに砲迫火力などを指向するように組織的な障害設置を行うであらう。

それも存在するとは予測できるものの、特殊作戦部隊の活動が活発に行われていたであらうと予測できる。

しかしながら、通常戦力による戦いが行われている戦場での特殊作戦部隊の効果は限定的であったことから、何らかの形で自分達の存在意義を見出すために行ったとしか思えない。

ウクライナに恨みを持たれないで戦後交渉をするには、わざわざこのような嫌がらせと思えるような行動をとるとは考えにくいからである。こうした非公然組織による活動は全体の政治的目的による軍のコントロールを外れているようである。

この事象は、第一次湾岸戦争において現場の兵士がイラク軍人や民間人に対して戦争法規に違反するような行動をとり、CNN などによる全世界に発信された行動と似ている。

ロシア軍の戦場におけるシビリアンコントロールの力は欧米諸国に比較して弱いと判断せざるを得ない。

#### 質問4 ウクライナ軍は何を目指して戦闘をしているのか。(エンドステートは何か)

前述したが、ロシア軍の拙劣な攻撃作戦ではあったものの、キーウ正面の作戦目的の達成（ウクライナに NATO 加盟を断念させる）と、東部地域のロシア人居住地域を確保するとの目的は達成されつつある。

つまり、まがりなりにもプーチン大統領の停戦条件の通りに通常戦力は展開されている。

では一方のウクライナ軍の目指すエンドステートは、何かを考えてみたい。

4月12日の段階では、ほぼロシアの要求通りの停戦協定とならざるを得ない。たしかにゼレンスキー大統領による国際世論を味方につけるとの政治的なメッセージは概ね成功しているものの、ウクライナは停戦を求めるために自分達の要求を下げてロシア寄りになりつつあるのが現状であると感じる。

しかし、ウクライナにとっては最終的にロシアとの停戦協定でウクライナ側の要求を少しでも盛り込むことが必要である。

その際、ウクライナを支援している欧米等いわゆる西側諸国の狙いである国際秩序の維持すなわち第二次世界大戦後に固定した国家の枠組みを武力によって変えさせないことも停戦条件に盛り込むべきであろう。

すると、停戦交渉がロシア側の要求である「ドネツク・ルガンスク両州の独立承認、クリミアの独立承認」をそのまま認める訳にはいかない。

少なくとも、武力で変更した地域をそのまま認めるのではなく、停戦後の話し合いでそれら3地域の去就を決めることが出来るような条件にもっていくことが必要である。そのためには、ウクライナはロシア軍の支配地地域にくさびを打ち込むような攻勢作戦を行い、ロシアに停戦を受け入れるような軍事ラインの構築を目指すべきであろう。

欧米等からの武器等提供支援を受けて行われるだろうウクライナ軍による攻勢作戦につ

いて考えてみたい。現時点（4月14日）のニュースでは、ロシア軍がマリウポリの港を完全掌握したと主張している<sup>4</sup>。

報道から感じることであるが、ウクライナ側の民間人の避難があまりに遅いと感じること、被害を受けた地域に居残り更には瓦礫の片付けをする民間人の姿まで映像で流れる。

住民混在というこの状況でウクライナ軍は本当に攻勢作戦ができるのか。

住民が残留している地域に対して、敵を撃破するための砲弾を撃ち込み戦車で機動打撃行動ができるのか疑問を抱かざるを得ない。

また、一度マリウポリから解囲作戦をするような報道があったが、停戦交渉のさなか重要な都市を放棄するのが妥当なのか、報道を聞いた時には正直疑問を持った。

ウクライナは停戦時にはどのような最終的な軍事態勢を目指しているのか、現時点では表に出てこず、不透明である。

実際にはそれを言えば、主攻撃方向や目標がロシア側に分かってしまい、対応されてしまうこととなるので、攻勢作戦開始までは表明できないだろう。ここではそれを予測してみたい。

ウクライナにとって、停戦後にクリミア、ドネツク、ルガンスクの扱いについて話し合う交渉の場を持つことが望ましい。

停戦時にロシアの条件通りに独立を認めてしまうことは、西側諸国の支援目的である「武力によって国境線を変えさせない」に反してしまうのである。

ロシア軍の攻勢能力や現在の確保地線の防御能力は、ほぼ余裕なくギリギリの状態であると思われる。

防衛省のホームページではロシア軍は大隊戦術グループ（BTG）125個単位を投入していると推測している。

これは、現在の確保ラインの全長が約700kmであることから、各BTGが担当する正面幅は8km強（旅団内3個のBTGを通常2個を第一線、1個を第二線に配置した場合）となり、従来のドクトリンの大隊レベルの防御正面幅2~5kmよりもかなり広く、極めて難しい防御となる<sup>5</sup>。

逆に言えば、攻撃戦闘のための部隊編成さえ出来れば、ウクライナ軍には反撃し得るチャンスがあると言えよう。

---

<sup>4</sup> <https://www.afpbb.com/articles/-/3400193>  
(2022/04/14 閲覧)

<sup>5</sup> 「ソ連軍〈作戦術〉」(デイヴィッド・M.グランツ、作品社、2021年2月5日、p300, 図表112)

下図「ロシア軍のエンドステート」に、ロシア軍の攻撃方向3本、ウクライナ軍の攻撃方向3本を記入している。



ロシア軍はクリミアとドネツク・ルガンスクとがマリウポリ付近で分断されていることから、同軍がクリミアに兵力増強したり兵站支援したりするにはクリミア半島南部の限定された経路を通るしかない。

この弱点は決定的であることから、ロシア軍としてはマリウポリ北部 150km に存在するドネツ丘陵付近までを確保したいところであろう。よって、ロシア軍が今後防御態勢を強化するにも真ん中の攻撃方向を選び防御地線を強固に使用とするだろう。

一方、ウクライナ側にとっては、ロシアのこの弱点についてクリミアとドネツクとの分断をより拡大したいところであろう。

ロシアの攻撃が先に行われるとは思われるが、ウクライナはロシア攻撃後の防御準備未完について、努めて早期に真ん中の攻撃方向からドネツクからマリウポリ一体を攻撃し、同地を回復したいところである。

これが今後予測されるロシア、ウクライナの攻防戦となろう。

ウクライナは引き続き欧米から軍事支援を得て、より強力になろうが、ロシアは保管戦車や退役軍人復活などに頼る以外戦力増強は困難である。長引くほど、ウクライナに有利になろう。しかし民間人の犠牲を考えると、長期戦を続けるのはウクライナにとってもリスクがある。

以上から、今後の双方の重点作戦正面はマリウポリからドネツク南部地域となろう。そして、同作戦による結果次第で停戦時期とその条件が決まるだろう。

民間人の犠牲との観点から一点付記すると、ウクライナ政府の民間人防護であるが、東部から正面押しで来るロシア軍に対して、民間人の戦場残留状態を解消しなければならないだろう。

幸か不幸か、ウクライナでは地下避難所が充実しており、戦場になっても地下で避難生活をしている民間人が多いと感じる。

ロシア軍が攻撃するまでに、またウクライナ軍が反撃するまでに、民間人を避難させるようにすべきであり、そうしなければウクライナ軍は国民のいる場所で用心しながらの戦闘をしなければならなくなる。

#### 質問5 アメリカの情報戦は成功したのか。

バイデン米大統領は 2022 年 2 月 10 日、ロシアがウクライナに侵攻しても、米軍をウクライナ国内に派遣することはない、と発言し早々にロシアに米の意志を明らかにしてしまった<sup>6</sup>。

この内容を聞けばロシアとしては、NATO は軍事介入してこないと即座に判断し、侵攻のチャンスであると確信しただろう。

この時点で抑止効果は無くなってしまったのである。

一方、その後バイデン大統領は、1 月、2 月とロシアがウクライナに軍事侵攻するだろうと発言している<sup>7</sup>。

結果的にはこれが奇襲効果を減じ、ロシアの初動であるキーウへの空挺作戦を失敗させ、同正面への地上作戦の進展を大幅に遅滞させたのである。

実際に他の 4 正面の前進速度が一日平均 15km～20km 程度なのに対して、キーウ正面の前進速度は一日平均 8km 程度である。

米国が軍の派遣意志のないことを発表したため、ロシアのウクライナ侵攻を決心させた。一方、ロシア軍は絶対にウクライナ侵攻すると発表したことによって、ロシア軍の奇襲効果を大いに減じた。

そして、②の矢印のようにハリキウ方向からキーウ方向へと攻撃させるなど、ロシア軍の

---

<sup>6</sup> <https://www.youtube.com/watch?v=LeRlz7Nu4rM>  
(2022 年 4 月 8 日閲覧)

<sup>7</sup> <https://break-place.net/daitouryoukonkkyo/>  
(2022 年 4 月 10 日閲覧)

予備部隊をより多く投入させたことは今後の長期戦に向けてその効果は大きいだろう。

米国発の情報では「ロシアはグルジア戦争のように短期決着を目指していた」ところ、その狙いがはずれて苦戦を強いられているとの状況を作したのは、バイデン大統領による正しい情報を使っただけの我側に優位な状況とする情報戦であった。

とはいえ、バイデン大統領による米軍の軍事介入否定は戦端を開いてしまった大きな要因であることは疑いがない。

そして、現在のように戦争が長期化しつつあることは、最初の奇襲を止めることができたことが逆にその原因となっている。

奇襲で決着がついていれば、ウクライナが政治的に失ったものは大きいだろうが、犠牲は少なかっただろう。

その失ったものとは、民間人やインフラの犠牲にとどまらず、ウクライナ東部地域のロシア人居住区の独立容認である。これは、国際社会が絶対に受け入れられないことではある。

バイデン大統領による情報戦はマイナスも大きかったものの、これからのウクライナの戦い次第で大いにプラス面が加算されることもあり得る。

プラス面を増大するためには、前項で述べたようにウクライナ軍が反撃して、停戦に持ち込み停戦条件に東部地域の独立承認をそのまま盛り込まないことである。

今後の欧米によるウクライナ軍に対する軍事支援次第で、結果的にバイデン大統領の情報戦の帰趨が決定するだろう。

「彼が動けば科すと私が約束したような制裁を、彼はまだ目にしたことがない」と述べ、米国をはじめとする国際社会のロシア制裁の度合いは侵攻の規模に左右されると付け加えている<sup>8</sup>。

今後、ロシアに対する経済的な制裁に加えて、ウクライナ軍への軍事的支援を強化し今後の攻勢作戦を成功させ、ウクライナ及び欧米諸国の望む停戦条件を実現するべきである。

---

<sup>8</sup> <https://www.bbc.com/japanese/60078342>  
(2022/04/10 閲覧)